

地域連携企画第1弾

# 河内国府遺跡里帰り展

2005年10月22日

長谷 洋一

渡唐天神図について

米田 文孝

河内国府遺跡の意義と遺物

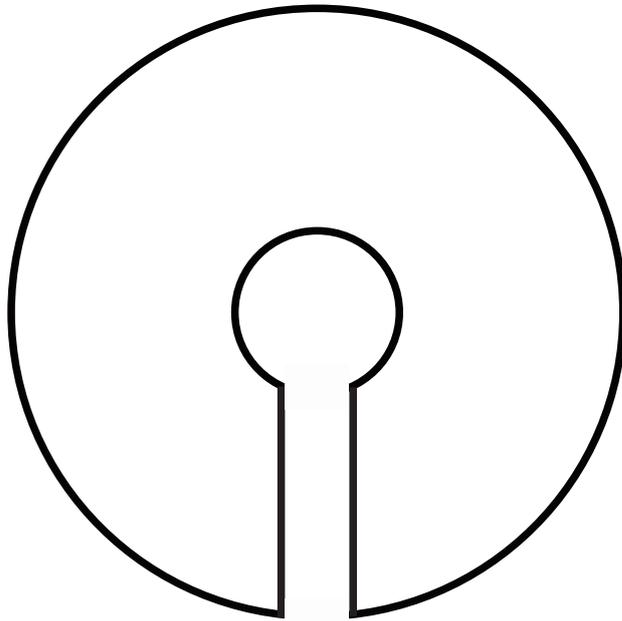


Kansai University Research Center for  
Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies  
Occasional Paper No. 2

地域連携企画第1弾

# 河内国府遺跡里帰り展

2005年10月22日



関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター



## ごあいさつ

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、研究例会、フォーラム、レクチャーシリーズ、そして地域連携事業などを行なっています。いうまでもなく、地域連携とは地域の方がたの協力をいただきながらさまざまな連携を計ることでありますが、文化遺産が地域の皆さまの共有財産であることを認識していただくことがその第一歩です。

2005年10月22日、地域連携企画の第1弾として、道明寺天満宮の絶大なるご支援とご協力をいただき、「河内国府遺跡里帰り展」を同宮におきまして開催することができました。本展は、大きな話題をさらった河内国府遺跡の出土品、そして天満宮所蔵にかかる渡唐天神図などを展観するとともに、講演会を開催いたしました。

国府遺跡は、大正6年から大正10年にわたって、本山彦一大阪毎日新聞社主の支援によって発掘調査が行われ、多数の縄文時代の人骨や土器、弥生時代の土器などが発見され、学界の注目を集めました。とりわけ、玦状耳飾をつけた人骨の出土は、当時の葬制を知る手がかりとなり、話題を一人占めしました。なお付け加えれば、本山彦一氏の国府遺跡発掘資料のほとんどが本山考古資料として関西大学博物館に引き継がれ、玦状耳飾6点を含む15点が重要文化財に指定されています。また、道明寺天満宮が発掘調査団本部であった関係上、発掘品の一部が天満宮の宝物として納められています。

道明寺天満宮には、優れたいくつかの渡唐天神図が所蔵されています。道服に身を包み、梅の枝を手にする渡唐天神像とは、菅原道真が夢の中で中国の無準禅師に参じて、一夜にして印可を得、梅一枝を持って帰ったという伝承に基づいて描かれたものです。その成立は、およそ1400年ごろとされ、中世以降、広く流布しました。

このたびの地域連携企画は、藤井寺市・道明寺天満宮のご協力を得て結実したものです。なによりもまず、地域の皆さまのご支援に対し、厚くお礼申し上げます。

2006年3月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター  
センター長 高橋隆博

地域連携企画第1弾

## 河内国府遺跡里帰り展

### 目次

ごあいさつ	
ご挨拶 南坊城 充興	5
渡唐天神図について 長谷 洋一	7
河内国府遺跡の意義と遺物 米田 文孝	14
図版	31
挿図・写真出典一覧	38
河内国府遺跡里帰り展 展示品リスト	40
編集後記	

## ご挨拶

## 道明寺天満宮宮司 南坊城充興

皆さんこんにちは。本日は河内国府遺跡展を開催いたしましたところ多数の方がご参集賜わり厚く御礼申し上げます。国府遺跡の遺物というものは、本山コレクションというものがあって、関西大学に入ったということは報道で知ってはいましたが、実物がどんなものであるかというのはほとんどわからなかったのです。しかし、この度、関西大学の大変なご尽力をいただき、里帰り展ということで、ここ藤井寺の地で公開されることになりました。ご存知のように藤井寺市は今、2つの「里帰り展」で沸き返っています。1点は井真成の墓誌が今度12月に帰ってくるということで、今非常に盛り上がっているところです。その前にもうひとつの里帰り展、もっと古いところの、縄文時代の遺品などの里帰り展が今回企画され、ほんとにありがとうございます。実は、この土地も、大体が国府遺跡と同じ台地上にあります。恐らく羽曳野丘陵の一番北端じゃないかと思うのですが、そこには人間は住みやすいところに住むという、当たり前なのが、おそらく縄文、あるいは縄文の前の無土器の遺跡があるということを承っています。そういう古い時代から人間が住み始めたのだらうと思います。

私は地名というものに大変興味があります。羽曳野市の古市の隣に、西浦、これ「にしうら」と読んだら面白くないのですが、「にしうら」と読んだらちょっとイメージが湧くのですが、西浦、あるいは蔵之内という地名があります。そして藤井寺のひとつ向こうに、阿倍野側に、高鷲という駅がありますが、そこには大津神社という神社があります。すべてこれは港湾の関係で、なぜ古市に西浦があるのか、ということを考えると、皆さん、おそらくここから見渡すところの、玉手山からこちら、天満宮にかけて丘陵になっているこの下を、さらに弥生ぐらの時代には八尾あたりまででしょうか、そのあたりのもっと前の温暖期は恐らく富田林市の喜志あたりまで、石川の流域ずっと向こうまで、河内湖ができていたのではないかなと思います。そういう形で、西浦とかそういう地名ができたのだらうというふうに思ってお

り、そういう意味では縄文時代の人たちも非常にこういう便利な土地にお住まいになっていたのだというふうに思います。また、国府遺跡から出てきた塊状耳飾、ここ国府遺跡で作られたものが、どういう風に使われていたのかということ、まあイヤリングということは解っていましたが、石の耳飾を耳たぶへ挟むにしてもおかしいと思っていました。今日の装着模式図をいただいて耳たぶの中へピアスのようにはめ込んであるというようなことを初めて知りました。

しかしながら皆さん、この土地はその後、戦乱の地に巻き込まれたことも事実でして、蘇我と物部との争い、この時はこの恵我川という、今の石川が血で真っ赤に染まったと載っています。その後また、南北朝時代には、太平記によると百万の軍が来たという、大軍は少しオーバーですが、雲霞の如きものがこの河内戦のときにやっぱりこの地を通っています。あるいは織田信長が河内攻めをしたときには、古市の隣に杜本神社の山の上に、信長が陣を敷いて指揮をしたということが『信長公記』に載っているのです。その時こら辺りが、道明寺も誉田八幡宮も一気に焼かれてしまったのです。だからお寺の伽藍もおそらくその時、焼けたということです。その後、ちょうど生駒と金剛の間に亀の瀬峠があるのですが、それを超えて徳川2代秀忠を総大将として、伊達政宗なんか国分へ陣を敷いていました。大坂方から真田幸村を総大将とする一群がこの道明寺を通して、ちょうど向こう側の玉手山のところにある小松山で、後藤又兵衛が戦死したあの場所で、道明寺の合戦が行われたということです。戦闘というのはそのくらいかと思っていたら、今次の大東亜戦争ではアメリカ軍が和歌山から艦載機で、大阪爆撃するときに、上空からみると大和川と石川がYという字に見えるということから、ここへ集合して生駒山を越えて一気に大阪を爆撃したという因縁の場所であるということを知り、まあそういうことも歴史的な事実としてあったわけです。

さて、この度、国府遺跡に住んでおられた一番ご先祖である方々が使っていた遺物が展示されることになりました。明治時代には縄文式の石器などそういうものがあるということが報告されていたようで、大正6、7年ごろに京都大学の濱田青

陵という先生を中心として発掘調査が行われました。そして、そのスポンサーが大阪毎日新聞、大毎の社長本山彦一、号名を松陰ともいわれていました方で、その方々がこの天満宮の社務所へ泊まりこんで毎日国府遺跡を発掘しておられました。私の祖父もそれに関わっており、父も学生時代でしたがそれに関わり、私たちが子供の頃には父からそういう話をよく聞いていました。実は私も考古学を高校時代にやっけていて、そして息子の禰宜もまた関西大学の史学地理学科でして、歴代4代にわたって、「発掘」という文字が新聞に出ますと興味を持ってみるという家系で、こういうのも大事なところかなというふうに思っているわけです。

まあ、そういうことで、ここ道明寺天満宮の宝物館の中で本山コレクションの一部を国府遺跡の遺品、遺物として展覧をさせていただいており、その中に玦状耳飾が2点あります。そこで学生さんなどに展示の説明したときに、私は必ず、「真ん中の石、これは何ですか？」と質問することになっているのですが、耳飾という人はもちろんいません。お金とか、まあいろんなことをおっしゃいますが、あれが78体発見された人骨の中の一部の両耳から出てきたのだという、まさに私も今日初めてあの石膏像を拝見させていただいたのですが、ああいう形で利用されていたのかと、貴重なものであったのだろうというふうに思っています。

そして、また、関西大学とこの道明寺天満宮とは、国府遺跡の同じ遺物があるということだけではありません。140年ほど前、四国の高松藩の大阪出張所に儒者で藤澤東咳という方がおられたのですが、そのご子息の藤澤南岳という先生が泊園書院という塾を開いておられました。高松藩でずっとお祀りされていた孔子の像を、明治5年、神仏分離令で、あるいは廃藩置県で、藤澤南岳さんが払い下げを受けられて、自宅で春秋に孔子を祀る積奠というお祭りをされていました。しかし、その像をそういう市中においておくのはもったいないということで、塾生で私の祖父がおりましたので、道明寺天満宮に預かってほしいということになり、お預かりしたのが明治35年でした。それ以来当天満宮では5月の日曜日に積奠のお祭りをを行い、一昨年には100回を迎えました。そ

ういうつながりもあり、竹屋町というところに泊園書院というのがあったのですが、戦時中、藤澤南岳さんのご子息の黄鵠さんや黄坡さんが中心となってやっておられましたが、その書籍が、やっぱり4代ですから、たくさんあり、その書籍を竹屋町においておくと戦災にあう可能性があるというので、当方へお預けになって宝物館の中で保存することとなりました。戦後、その書籍をすべて自宅に持ち帰らずにそのまま関西大学にご寄贈なさって、泊園文庫として現在残っておるということです。そういう意味でも関西大学と直接のつながりはないのですが、そういう遺跡を通じて、あるいは泊園文庫を通じてつながりが深いなあということを感じざるを得ないわけです。

また、今回、大学から遺物がこういう場所に持ってこられて展覧されるのが初回ということですが、後ほど文化遺産学研究センターについては高橋館長さんからお話があるかと思いますが、関西大学さんは変わろうとされているようで、高槻に小学校をお建てになるとかで、今まで大学は、みなさん自分のところに来てもらうだけでしたが、今回は打って出るという形にかわっているようです。そういう意味でこういうところで展示会を開催されたのではないかと思います。今日は、また、渡唐天神につきましてもご専門の先生のお話があるようで、遣唐使、遣唐僧、あるいはそういう中で、最後の遣唐使に任命されたのが菅原道真公であり、そして、唐が荒れている、危険だということで遣唐使を廃止されたのも菅原道真公ということで、井真成の展覧会、天満宮へもそういう意味で関係があります。さきがけとして渡唐天神図についても研究をご発表していただけるということです。今日は、実は皆さん、あんまりPRいたしていませんでした。というのはあんまり多く来られても、入れない方がおられたら困りますので、藤井寺市の広報の宣伝と、昨日読売新聞に小さく出まして、それ以外は国府地区と惣社地区の区長さんにはパンフレットをお持ちして、地元ですからぜひこういう機会にというご案内を差し上げただけで、あるいは藤井寺市の郷土史研究会のみなさんにお声かけしただけですので、あんまり日は経っていないのですが、多数お越しいただきましてありがとうございました。

## 渡唐天神図について

関西大学文学部 長谷 洋一

改めまして関西大学の長谷と申します。今、高橋先生がおっしゃったように、午前中はちょっとお天気が悪かったのですが、こんなに大勢の方に来ていただきまして本当にありがとうございます。先ほど紹介にもありましたように、去年の3月まで20年ばかり堺市の方でお世話になっていました。こういう講演になりますと、今学生諸君がやっているように、博物館でスライドとかプロジェクターを準備するのは非常に手馴れたものですが、実は演壇に立つということは、まだまだ馴れていませんので、精一杯頑張りたいとは思いますが、お聞き苦しい点等あると思います。なにとぞ温かい目でみていただきたいと思います。

私が専門にしているのは、江戸時代の仏像を長くやってきました。今もやっていますが、道明寺天満宮に渡唐天神図があるということを開き、今日は少しそれでお話しをしたいと思います。宮司様がさきほどおっしゃった「ご研究」ということではなく、世の中にこういうような渡唐天神があるよ、という説明ですので、気楽にお聴きいただければ幸いです。

天神あるいは天満宮に関わる美術作品の研究というのは、実はこれまであまり進んでいませんでした。数年前に京都国立博物館で「天神様の美術」と題した大規模な展覧会がありました。おそらく全国の天満宮あるいは菅原道真関係の資料が集まったのは初めてだと思います。そこで実は天神様に関わる美術作品あるいは歴史資料がこんなに豊富であるということが、我々美術史のほうも驚いたわけで、最近、ようやく渡唐天神図の作例が集まってきた次第です。実のところ、研究というのはこれからまだまだ進めていけないといけな部分がありますので、検討の余地は大いにあり、未開拓の分野といってもいいぐらいです。

さて、レジュメに道真公の紹介をごく簡単にまとめておきました。皆さんご承知のことだとは思いますが、道真公はエリートで、文もたち、どんどん出世をしていきます。さきほど宮司様がおっしゃいましたように、唐の世情が非常に不安であ

ることから遣唐使をやめた方がいいということで、遣唐使を廃止させたことでも有名です。日本の美術は、それから一応表向きは今までの中国をお手本とした文化を離れて、国風文化という形で、和様化、日本の当時の人々が美しいと思う感性に従って、たくさんの美術作品が生まれます。そういうところにも道真公は関わっています。

残念ながら、才能ある人はどうしても恨まれるということになるのでしょうか、藤原時平の中傷、讒言により、大宰権帥ということで大宰府に左遷され、903年に大宰府で失意のうちに亡くなります。美術史の研究者が注目するのはそこから以降で、これまで例えば「北野天神縁起絵巻」で清涼殿に雷が落ちるとか、雷神の姿がどうかとか、ということが多少はありました。今日お話しするような渡唐天神を含めて、天神様のお姿に着目した研究というのは、実はこれからであって、それを少しわかっている範囲ではありますが、ご紹介していきたいと思います。

道真公は亡くなると、すぐに比叡山のお坊さんのもとに、帝釈天の許しを得て、帝等に復讐をするというようなことも出てきて、どうしても恨みを抱いたまま神様になったというか、そういったイメージが最初の方は強いわけです。天神の姿を描いた絵画というのは様々ありますが、まずは渡唐天神に入る前に説明したいと思います。

まず一番多いのは束帯像です。もともと貴族の正装であるフォーマルな服装で、束帯を着て、垂纓の冠を被り、黒の上着、袍、そして、下襲を後ろに翻す服装をしています。手には笏と太刀を持っており、たいてい坐っている場合には畳の上に坐っています。

京都・北野天満宮蔵束帯天神像は、根本御影と呼ばれ、14世紀から15世紀の作品です。これが、御神体になるわけで、他見をはばかることなので、これがたくさん世に流布することなく、ごく限られた部分での作例しかありません。

多いのは、大阪天満宮蔵束帯天神像（16世紀）のような作品です。この束帯像というのは、フォーマルな姿であるので、生真面目な、非常に威儀を正した優しい顔をしているとばかり私は思ってい

ました。今回集めてみると、意外と怒っています。

この図も眦を上げて、眉間に皺を寄せて、口を開けて、怒りの表情を持った図になっています。最初というのはどうしても、非望の死を遂げた方が神様になったということで、こういう少し怒りを含んだ顔、形の表現になっています。

山口・防府天満宮蔵東帯天神像は桃山時代に描かれました。山口の雲谷等顔という画人が描いた東帯天神像です。先ほどの図に比べると、後ろに背景が出てきたのがおわかりかと思えます。松と梅の風景一別にはこれは表の風景でもありませんが一が出てきます。松は、アジア全体にとっての神聖なシンボルであり、梅はもちろん道真公の、こちら（道明寺天満宮天寿殿）の幕にも梅鉢の紋がありますが、そういうのがシンボルとして描かれています。

次は、土佐光起が描いた東帯天神像です。後ろに波を描かれた衝立を立て、その前に威儀を正して坐っています。背後には、先ほど雲谷等顔の作品でみた松と梅が背景になり、上に詩文が載るといった図像になっています。土佐派というのは非常に細かい部分まできっちりと丁寧に描く流派で、



図1：大阪・大阪天満宮 東帯天神像

隅々まで神経の行き届いた作品になっています。

で坐った像でしたが、立った像もあります。大阪・大阪天満宮蔵東帯天神像（図1）は片手に梅の枝を持ち、太刀を佩いて立つ形になります。同じ作品が道明寺天満宮にもあります（図2）。背景には松、手には梅の枝をもち、このバリエーションがまた一つの見所になっています。

次に綱敷天神像を紹介します。綱敷というのは、道真公が大宰府に左遷になり、今ですと、飛行機か新幹線に乗りますが、当時は船であり、風待ち、あるいは宿泊のため、港に停泊しないといけません。東帯天神像でみたように、威儀を正した時は畳の上に座っていますが、何しろ船の上なので畳がありません。そこで、敷物がわりに船の艦綱をくるくると巻いて、それを円坐、座布団がわりに座るわけです。「臥薪嘗胆」という言葉がありますが、巻いた艦綱船の上に座りながらひしひしと怒りがこみ上げてくるわけです。そうすると先ほどにも増して怒りの表情が出てきます。また怒ると白髪になるということで、そうした激しい怒りを持つ天神像も現れてきます。

大阪・佐太天満宮東帯天神（綱敷天神）は、16世紀の作品です。先ほどのちょっと恐いな、ということから、かなり怒っている、という表情になっています。眉間に皺を寄せ、白髪です。

私が美術を非常に面白く感じるのは、感情を表



図2：道明寺天満宮 東帯天神像

現するのに、表情だけでなくふとした仕草で表される場合もあることです。ここでみていただきたいのは、両手でもつはずの笏がこの図では左手で持っています。その手をみると、随分力の入った表現になっている。この力は何だ、というと、やはり怒りの力であって、こういう何気ない仕草のところに、描かれた人物の感情が表れるというのが非常に面白いところだと、私は思うわけです。もうひとつ、兵庫・津田天満神社蔵綱敷天神像は、かなり苦渋に満ちた表情で、やはり笏を持つ手が左で、まさに叩き付けんばかりの怒りの表現がうかがえます。表情だけでなく、なお強調するかのようにならずかな仕草のところに変化を加えて感情を表わす手法になっています。

もうひとつ、影向像という天神像を紹介します。これは関東地方に多少確認されている天神像で、神奈川・荏柄天神社の縁起に基づく雲に乗ってやってくる像です。今日のようなすごくきつい雨、あるいは雷の中、黒の束帯を着けて雲の上に立っている天神が現れる図像です。奈良・薬師寺には、16世紀に描かれた影向天神像があります。先ほどと同じ白髪で、顔は苦渋に満ちています。

以上、天神像のいくつかをみてきましたが、これらは道真公の生涯に関わる事柄からの肖像でした。

ようやく本題に入りますが、渡唐天神というのは、実は道真公の生涯とは何ら関係ない説話から始まった画像です。

話の筋としては、先に高橋先生が少しおっしゃいましたように、南北朝時代に中国へ留学し、博多・崇福寺にいた円爾のもとに、道真公が現れて、禪の悟り、印可を得たいと希望します。そこで、円爾は師匠である中国・宋の無準師範を紹介합니다。そうすると、道真公は一夜のうちに博多から中国・宋に渡り、無準師範のもとに参じて、印可という証明書をもらい、衣を授かってきたというものです。この説話に基づいて渡唐天神図が作られました。

無準師範と道真公の生涯を比べると、200年くらい違い、まずありえない話です。成立をした時も、「それはおかしいじゃないか」という人がやはり出てきました。花山院長親の『両聖記』、この両方の聖というのは、「無準師範」と「道真公」

ですが、そこにちょっと強引ですがそのあたりの事情が書かれてあります。世の中には有と無、両方の世界があるにも関わらず、なぜありえない話と断言できるのか、事の真偽を論じるのか、という問いかけがなされます。私の研究は仏像彫刻ですが、似たような経験があります。私どもは神・仏像を作品とみますが、神社や寺院にとって神・仏像というのは信仰の対象であって、今も現に生きている、我々を見届けているものであるという感覚です。そういう世界の中において、なぜこの説話だけを事実かどうかの議論をするのか。あるいは、この説話を作ったのは自らの先代であって、その禅僧の心する所を汲み取ってやれないのか、おろそかにするのか、という記述が『両聖記』の中にみられます。

そういうやりとりはともかく、少し歴史的にみてもみると、どうやら室町幕府と非常に強い結びつきを持つ禅宗が一般の人々にも広めていけない時に禅と一般の人々を結びつける力としてそれまであった天神信仰をうまく取り込んで、禅の普及に役立てたという説があります。また実はお坊さんになる時の入学式、授戒会を行なう権利が、当時比叡山と北野天満宮にあったそうです。だから、どうしても北野天満宮と懇意にしないと授戒会が開けないということもあるので、禅と天神信仰が結びついたという説もあります。

ともかくそうした形で渡唐天神図がだんだんと広まっていくわけです。では渡唐天神の作品についてみてきたいと思います。

#### 初期・「渡唐天神図」—礼拝像として—

最初に、日本で一番古い「渡唐天神」としては、岡山県立美術館蔵本があげられます。1417年に書かれた惟肖得巖（いしょうとくがん）の賛があります。上の方には禅僧による賛文があり、下に渡唐天神の絵が描かれている基本的スタイルになっています。先ほどからみてきた『束帯天神』などと違う特徴を4つばかりあげます。まずは頭巾、あるいは仙人の被る帽子である仙冠を被っていて、中国服を着ています。梅の枝を持ち、右腰の所には肩から下げたポシェット（袈裟袋）が描かれています。そのポシェットには無準師範から戴いた衣が納められています。この4つが渡

唐天神図の大きな特徴となります。

京都・花園大学禅文化研究所蔵本も 1436 年の惟肖得巖の賛があります。これら 15 世紀前半の作品が、現在のところ最も古い作品になります。全体に正面を向き、足は少し開き気味ですが、すつと背を伸ばして立っています。これは、仏像でも同じで、正面を向くというのは基本的に礼拝の対象になります。まさに「渡唐天神図」を掛けて、渡唐天神を礼拝していたということの証拠にもなると思います。大阪・正木美術館本（1448～1462 年）の賛には「北野霊廟像」と書かれています。大阪・道明寺天満宮本（図 3）も正面を向いています。

「なんだ、皆同じではないか」と思われるかもしれませんが、岐阜・円鏡寺本では、少しだけ裳の端が変化しています。「渡唐天神」の図像に対する細かい規定がないので、徐々に、描き手や使い手の中で図像の形式がどんどん変化していくわけです。それがまた「渡唐天神」の作品を見る面白さにもなります。これから、変化の具合を順に



図 3：道明寺天満宮 渡唐天神図

見ていきたいと思います。

#### 関東画人の「渡唐天神図」—礼拝像からの変化—

まず祥啓が描いた大阪・正木美術館本です。渡唐天神が横を向いて梅の香りを嗅いでいます。本来、ポシエットが描かれるべきですが、天神像の向こう側（向かって左側）にあるので描かれていません。初期の渡唐天神図と比べると、正面向きの像がだんだんと横を向いて、動き出すようになってきます。山梨・南松院本では同じように梅の香りを嗅いでいますが、向かって右側から強い風が吹き、非常に動きのある姿になっています。先ほどとはずいぶん図像が変わってきたことがお分かりいただけるとと思います。

#### 雪舟の「渡唐天神図」—自然との交感—

雪舟も渡唐天神を描いています。岡山県立美術



図 4：岡山県立美術館 雪舟筆 渡唐天神図

館にある作品（図4）で1501（文亀元年）につくられました。自然との交感ということで、梅の花を持つという定形に従っていません。確かに天神の下には梅の枝がありますが、上には松の枝があり、松の根は向かって左側にあつて、そこから大きく円を描いて画面から外れ、再び松の枝が垂れ下がってくるという構図になります。その根もとに腰掛けて右側を見ている渡唐天神が描かれています。この像だけをみると、なにか水墨画や山水図の屏風に描かれる仙人のようにみえますが、やはり腰にはポシットがあつて、頭巾を被っているのでこの図も渡唐天神図であることがわかります。

#### 狩野派の「渡唐天神図」— 図像の継承 —

このような形で渡唐天神図のバリエーションが広がっていきます。

狩野元信が描いた個人本（16世紀後半）は、初期の渡唐天神図— 例えば、岡山県立美術館蔵本 — と比べてみますと少し違いがあります。手の合



図5：道明寺天満宮 渡唐天神図

わせ目ですが、初期の画像では真正面からみるので体の中心で手を合わせますが、この作品になりますとずいぶん左に寄った形式になります。よくみると腕の構図も違ってきます。ということは、体を捻っているということになります。つまりそれまで直立していた渡唐天神が体を捻るようになってきたということになります。大阪・道明寺天満宮蔵本（図5）もやはり腰を捻った形になっています。これは徐々に天神様が腰を捻りながら梅の香りを嗅ぐというようなバリエーションになってきます。

#### 海を渡った「渡唐天神図」

— 中国・寧波での作例 —

中国・明時代になりますと、日本の商人や僧侶が多数中国へ渡ります。彼ら向けに中国でも渡唐天神が描かれました。まさに海を渡って来た渡唐



図6：道明寺天満宮 仙厓筆渡唐天神図

天神図ということになります。

方梅厓の賛をもつ「渡唐天神図」（個人蔵）は16世紀半ばに作られた中国製の渡唐天神図です。京都の隣華院にも同じ作品が残っています。

#### 近世の「渡唐天神図」—多彩な展開—

江戸時代には、数多くの渡唐天神が作られました。東京・湯島天満宮本は狩野安信によって描かれた、なにか実は左肩に梅を掲げて闊歩して歩いてくるような渡唐天神を描いています。道明寺天満宮本も梅の枝が長く伸び、柔らかな曲線で描かれています。

大阪・道明寺天満宮の仙厓筆「渡唐天神図」（図6）は、面白みのあるユーモラスな渡唐天神に変わっていきます。さらに同宮蔵の近衛信尹筆『文



図7：道明寺天満宮 近衛信尹筆 渡唐天神図

字絵渡唐天神図」（図7）は、近衛信尹が描いた文字絵の渡唐天神です。天神像の頭部から左肩にかけてが「天」、右手から腹部、左手にかけてが「神」という草書体で輪郭を表しています。

私の資料台帳の中にも一つ、木彫像の渡唐天神像（福岡・水鏡天満宮蔵）があります。これは1729年に京都の仏師である吉田正慶が作った、非常に珍しい像です。用材には大宰府の梅の枝を使ったということが書かれていて、本当かどうかというような無粋なことは申しませんが、そのようなロマンのある彫刻です。

『職人尽絵』には、多数の職人が描かれています。そのなかで数珠を作る職人の場面では、作業場の壁に渡唐天神が掛けられています。（図8）珠屋さんの壁に渡唐天神が掛けられているは何故かということですが、今日（10月22日）の朝まで考えたのですがわかりませんでした。今後の考察とさせていただきたいのですが、渡唐天神の広まりをここにみるすることができます。

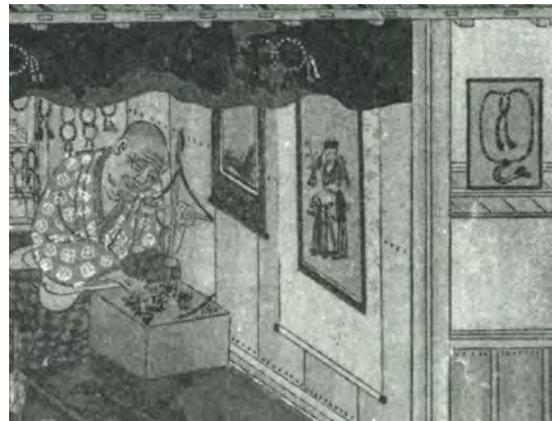


図8：数珠師 『職人尽絵』

最初は非常に怒った顔をした天神像でしたが、そのうちどんどんと変化して、最後はユーモラスな絵になります。それは「怒りの神様」から、我々に親しみの持てる神様になってきたことをも意味するわけで、ご存知のように、童謡にも「天神様の細道」といい、また学問の神様でも有名です。怒りの神様であった天神様が、徐々に我々に親しみのある神様になっていった、そういった変化の中で、「渡唐天神図」の果たしていった役割ということを、今一度、考えていかなければならないのではと思います。

これで、拙い発表を終わらせていただきます。  
ご清聴ありがとうございました。

---

長谷洋一（関西大学文学部助教授）

関西大学卒業後、堺市博物館に勤務。専門は美術工芸史、特に仏教彫刻史の専門家である。なにわ・大阪文化遺産学研究センター・生活文化遺産研究プロジェクト研究員。

道明寺天満宮所蔵の天神図（一部）

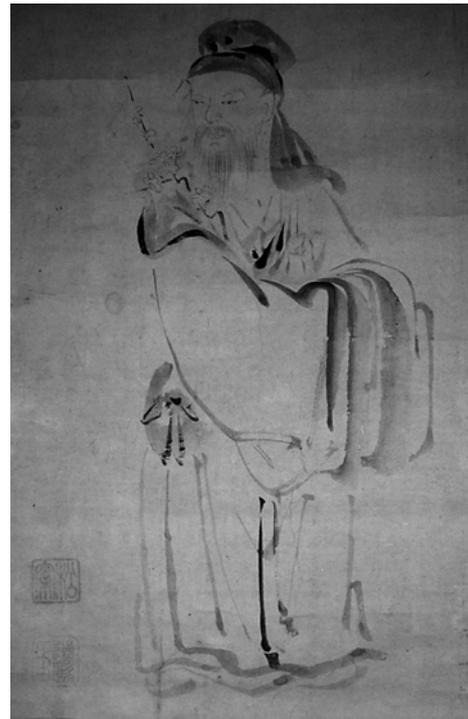


図 10：道明寺天満宮 渡唐天神図



図 9：道明寺天満宮 影向天神像



図 11：道明寺天満宮 渡唐天神図

## 河内国府遺跡の意義と遺物

関西大学文学部 米田文孝

今回の出開帳開催に当たり、なにわ・大阪文化遺産学研究センター長の高橋隆博先生から、「国府遺跡の意義と遺物というタイトルで、50分間に纏め平易に解説するように」という課題を与えられました。

ハイと申し上げたものの、旧石器時代から連綿と継続している、複合遺跡である国府遺跡について、多岐に及ぶ難しい内容を易しくお話しすると

いうこと、限られた時間内でこれはかなり難しい課題です。

しかし、遍く知られているように、現在の関西大学博物館の収蔵品の中心を占めるのは、国府遺跡の発掘調査を手がけられた、当時の大阪毎日新聞社主であった本山彦一氏が精魂傾け収集された、いわゆる本山考古資料です。末永雅雄先生が創設され50有余年の星霜を重ねた関西大学文学部考古学研究室のロゴマークが国府遺跡出土の珧状耳飾であること、さらに、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの事業推進で献身的にご協力

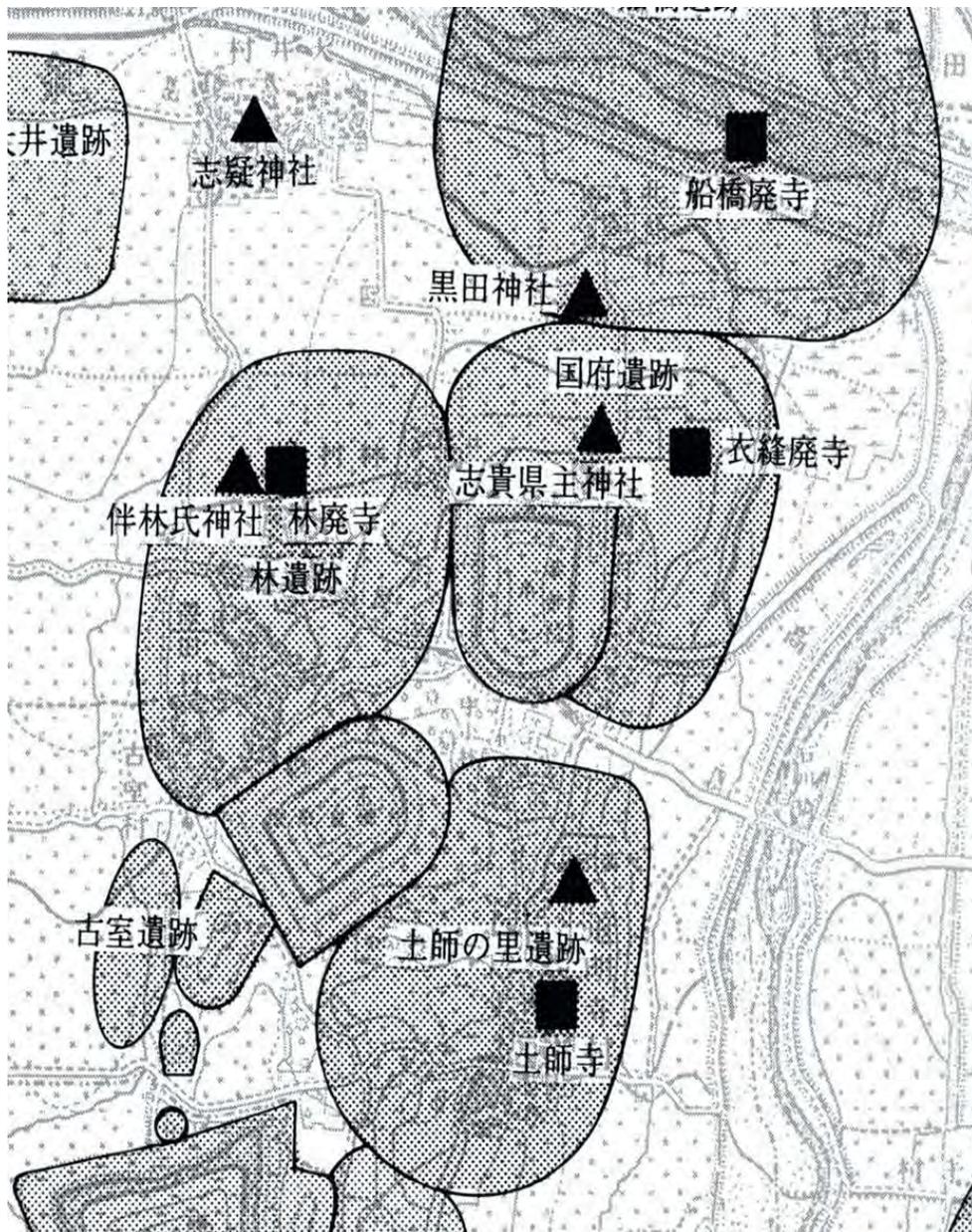


図1：国府遺跡周辺遺跡分布図（藤井寺市教育委員会 1996）

賜っている道明寺天満宮さんにも、後でお話しさせていただく経緯により、当時出土した玦状耳飾が保管されているというご縁等々、ここで少しは足下のことも勉強しておきなさいというセンター長の親心と、早速あれこれと紐解きはじめました。

しかし、学生時代から変わらない付け焼き刃流では適うはずもなく、結局は国府遺跡といえば玦状耳飾ともいわれる、縄文時代前期を中心とした特異な装身具とその評価をめぐる話題を中心に、先学の調査研究成果を活用しながら要点を解説させていただくことになりました。

## 1. 国府遺跡の現状と調査の沿革

### I 国府遺跡の現状と発掘調査

国府遺跡は明治20年代(1892年、明治25年)に、後に地理学界の重鎮となられる、当時三高生の山崎直方氏によりその存在が知られるようになり、第一世界大戦中の大正6(1917)年から、京都大学などにより発掘調査が開始され、10回に及びました(註1)。第二次大戦後は、大阪市立大学の研究グループや大阪府教育委員会、藤井寺市教育委員会などにより、断続的に発掘調査が実施されています。(註2) その成果は多岐に及びま



図2：国府遺跡と道明寺天満宮

すが、本日は縄文時代前期を中心とした玦状耳飾に焦点を絞って解説させていただきます。

## II 国府遺跡周辺の遺跡

最初の図（図1）は、国府遺跡を中心とした遺跡の分布図です。これらから一目瞭然、地元の皆さんが日頃、目にされている視覚的に明らかな古墳はもとより、地下に包蔵された遺跡がないのは、石川・大和川の流路や氾濫原だけであることが判ります。なお、船橋遺跡の中心部を大和川が東西に横断しているのは、元禄17（1704）年に開始された付け替え工事の結果です。

また、遺跡の表示がない空白部分も、現在は確認されていないということだけで、未知の遺跡が地中に眠っている可能性があります。こうしてみると、藤井寺市域は遺跡が密集している、まさに文化財の宝庫であることが判ります。

この図（図2）は、国府遺跡を中心とした行政区画図で、本日の話題に関する地点を示したものです。

## III 国府遺跡の現状（写真1～3）

国府遺跡は藤井寺市総社の周辺に存在しています。現在、国府遺跡の中心部は国の史跡に指定されており、国や大阪府、藤井寺市の担当行政で、遺跡の保存措置や整備が講じられています。ただし、藤井寺市域にはわが国を代表する大型古墳群のひとつである古市古墳群をかかえていることや、先ほど申しましたように、地下に包蔵されている遺跡は視覚的に判りづらいことなどが重なり、国府遺跡については一般的に関心度が低いかもしれません。



写真1：史跡国府遺跡説明版

さて、発掘調査が開始された大正時代には、遺跡一帯は果樹園であり、民家が散在していました。このような景観は昭和30年代まで基本的に変わりませんでした。このように、高度成長とともに藤井寺市域は南河内の商業・住宅地として開発の波に襲われるようになりました。そのため、遺跡保存の観点から、地域住民の方々の協力を得て、昭和49（1974）年に中心部が国指定史跡になり、昭和52年の追加指定以降も、行政機関の手で順次に指定地の公有地化が進められています。



写真2：国府遺跡の現状



写真3：国府遺跡の碑

## IV 志紀県主神社と衣縫廃寺（写真4・5）

地元の方は当然ご存じと思いますが、国府遺跡のある場所に志紀（貴）<sup>あがたぬし</sup>県主神社が鎮座しています。この神社は、後に述べるように大王家の直轄領である志紀県の県主が奉斎していたことに由来しますが、『延喜式』（康保4〔967〕年施行）の中にある「神名帳」に記載された、由緒正しい神社です。延喜式に記載されていることから、式内社と呼ばれますが、大中小の格付けの中でも志紀県主神社は大社に位置づけられている格式の高い神社です。ちなみに、旧河内国内で式内社は

113社、大社は23社あります。

なお、志紀というのは国府遺跡周辺の地名で、古代には河内国志紀郡とよばれていました。また、県主とは本来的に称号あるいは職名ですが、このような制度が廃止された奈良時代以降になると、姓に変化しますので、志紀県主とは氏と姓を表すものと考えられます。県とは現在でも兵庫県や奈良県のように地方の行政単位として存在していますが、古い時代の行政単位で、律令体制では国や郡に変わっていきます。すなわち、県主とはこの県の首長、つまり現在の県知事や市長に相当します。



写真4：志紀県主神社

ところで、県、県主は西日本中心に約60が確認できますが、志紀の県主は『古事記』に、「雄略天皇が生駒の暗峠で河内を国見したとき、堅魚木<sup>かつお</sup>を上げた立派な家を見つけ、志紀大県主の家だと知り大王家に似せた家を造るのはけしからぬ、焼き払えと命じた」という内容の記事があるように、大変な権勢を誇っていたことが判ります。

この記事の後段は志紀大県主が平身低頭、白い犬に布を背負わせて奉獻し事なきを得たという記述に続きますが、これは一種の服属伝承と考えられます。さらに、雄略天皇が犬と布を奥の若日下部王に与えたという点に注目された中西康裕さんによると、県主は天皇の内廷の部分に関わっていた職掌と考えることもできます(註3)。その他、河内国造、志紀屯倉なども重要ですが、時間の関係で省略します。

また、大和川と石川の合流地点には、河内国分寺・国分尼寺跡、田辺廃寺、原山廃寺、玉手廃寺、青谷廃寺など、古代寺院が集中しています。国府遺跡内には、衣縫廃寺の塔心礎といわれる礎石が

あります。その他に衣縫廃寺出土の礎石といわれる礎石が、国府八幡神社境内の灯籠台石として2個、蓮休寺境内に1個が保存されています。

この衣縫廃寺は、『日本書紀』『続日本紀』に散見できる倭漢氏系の衣縫氏・衣縫王と関連すると推定されています。塔心礎がある場所の小字がイヌイであることも参考になると思います。

なお、「河内国府は志紀郡にあり」と『和名抄』にあります。その位置には諸説があり、国府遺跡(註4)や、はざみ山遺跡(註5)、船橋遺跡(註6)説など、定説をみしていない状況にあります。



写真5：衣縫廃寺の塔心礎

また、先ほどの地図(図2)の下端近くに道明寺天満宮さんがあります。道明寺天満宮は、旧国郡でみると河内国志紀郡土師郷に所在し、国府遺跡と同じ台地上に立地しています。天満宮の縁起によりますと、古く垂仁天皇の時代に遡る土師社が前身とされています。時代が下って、菅原道真公の叔母・覚寿尼が土師(菅原)氏の出身地にある道明寺に居を構えており、道真公もよく訪ねていたことが『国花万葉記』などの文献から伺えますが、天曆元年(947)に道明寺と改称し、天神(道真公)を祀ったのが天満宮の起こりとされています。

明治5(1872)年には、神仏分離令により道明寺と天満宮とに分離し、昭和27年(1952)に道明寺天満宮と改称して今日に至っている由緒正しき伝統のあるお社です。なお、宝物館には菅公遺品と伝える国宝6点、重要文化財2点を含む、数千点に及ぶ各種の史資料を所蔵されています。

このように、文献史料などの検討からも、河内国府遺跡の周辺は古代から重要な歴史の舞台であったことがわかります。

V 国府遺跡発掘調査区図

この図（図3）は、国府遺跡の中心部で発掘調査された地点の位置関係図、次の図（図4）は、本日の話題の中心である、玦状耳飾と関連の深い埋葬人骨が出土した地点だけを表示したものです。現時点の発掘調査成果からは、縄文人骨が小字「骨地」を中心とした、特定地点に集中して出土していることが理解できると思います。

VI 大正時代の発掘調査風景①（写真6）

発掘調査の翌年、大正7（1918）年の7月に刊行された報告書に掲載された、京都帝大による第一回調査の風景です。この写真図版自体が、当時の遺跡景観や発掘調査の具体的な様相を確認することができる重要な記録であり、文化財です。

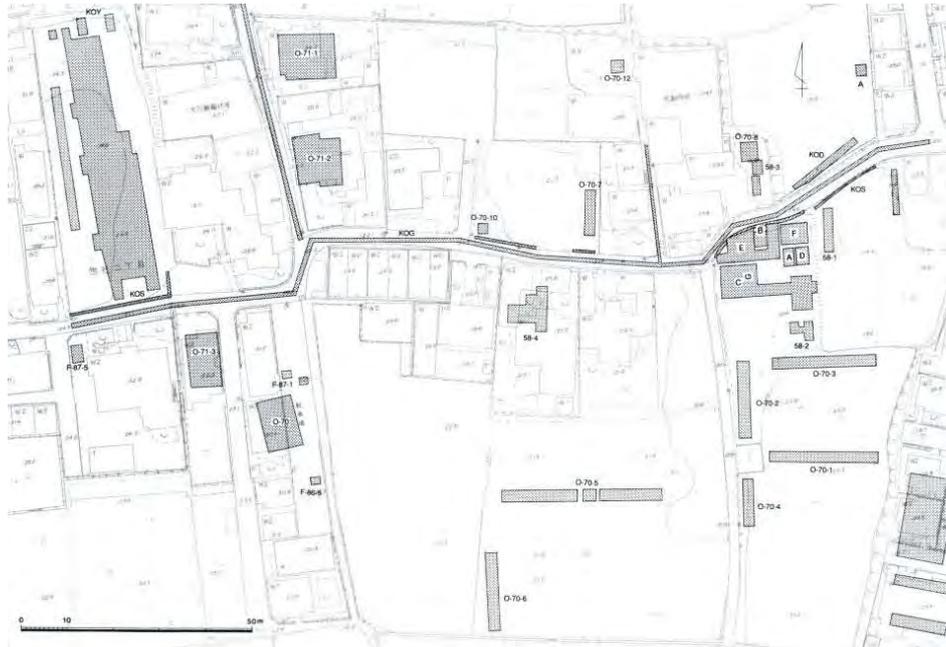


図3：国府遺跡中心部の発掘調査位置 藤井寺市教育委員会 1996)

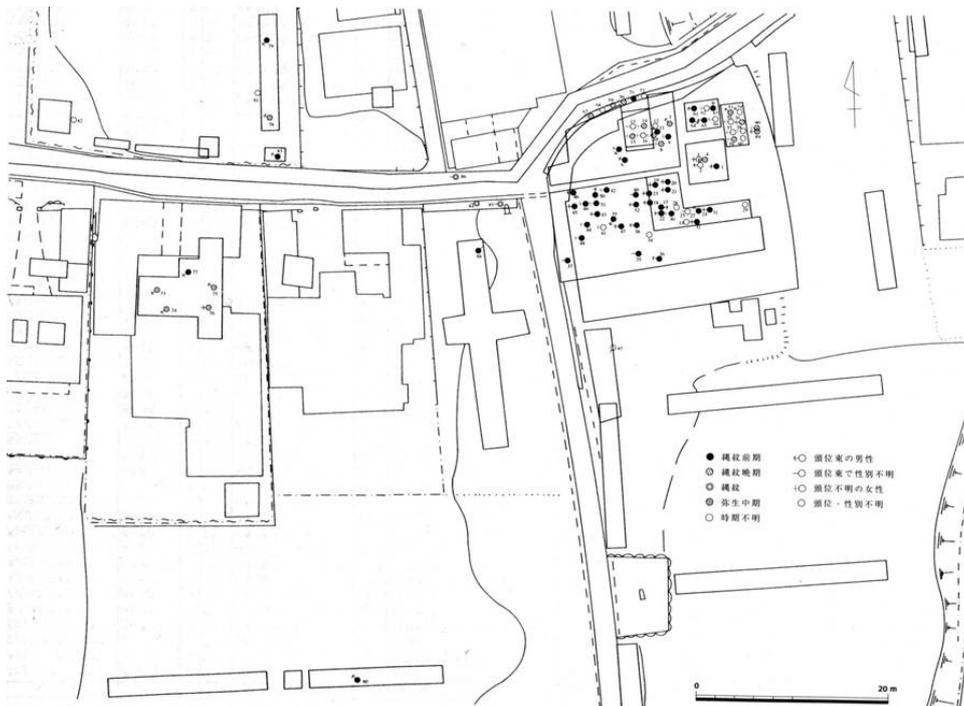


図4：国府遺跡出土の人骨分布（天野 2001）

## VII 大正時代の発掘調査風景② (写真7)

同じく、大正7(1918)年8月に実施された京都帝大の第二回調査の発掘調査報告書に掲載された調査風景です。国府遺跡の埋葬人骨は比較的浅いところにあり損傷を受けていることや、時期の異なる人骨が重複していることもあり、その所属時期を正確に判定することは難しい状況にあります。確実に共伴した土器や遺物をみた場合、縄文時代前期と弥生時代前期のものがあり、古墳時代前期の埋葬人骨が含まれている可能性があります。しかし、現在までに発掘された埋葬人骨は、

数量的に縄文時代前期のものが中心であることは揺るぎません。

なお、濱田耕作(青陵)先生は英国留学で見聞してきた、当時としては最新の発掘方法で国府遺跡を調査されており、報告書には、①縄文土器の系統、②埋葬人骨の人種問題、③身体装飾品などについて言及されています。また、調査報告書を直ちに刊行されていますが、今日に至るまで求められている考古学調査の基本姿勢の一つを再確認させられます。



写真6：京都帝国大学第1回調査風景(濱田1918)



写真7：京都帝国大学第2回調査風景(濱田・辰馬1920)

Ⅷ 大正時代の発掘調査風景③ (写真8・9)

これらの発掘調査の進行状況と結果については、調査期間中に、逐次、大阪毎日新聞で詳細に報告されました。写真8の新聞記事は大正6(1917)年10月15日付の「河内国府遺跡調査(1) 今回の学術的発掘」として、岩井雍南記者が署名記事にしています。今日のわが国では、いずれかの新聞で発掘調査の記事が掲載されない日はないといってもよく、時に全国紙の一面に考古学の記事が載る世界的にもまれな環境にあります。本山彦一氏が大阪毎日新聞の社主であることを考えても、当時としては異例なことでした。

連載された記事の内容は、国府遺跡を発掘する契機について述べたもので、当初はハンドアックス状の大型打製石器が旧石器か否かの確認にあったことがわかります。やがて、埋葬人骨が出土すると、発掘の関心は急速に人骨に移っていく様子が如実に描かれています。なお、後で詳細を述べますが、発掘調査は道明寺天満宮の南坊城良興氏の支援を受けて行われていることが、記事の中に明記されています。

その後、先ほど申しましたように、これらの発掘調査の報告は、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第二冊、第四冊として刊行されています。

なお、現在の精緻な発掘調査報告書をご存じの方から見ると、一見非常に簡略的なものと感じられると思いますが、約90年前の当時、考古学研究に関係する教員が在籍していたのは東京帝国大学と京都帝国大学など、ごく限られた大学機関のみであることを考え合わせると、創生期の発掘調査報告書としては問題意識が明確な、非常に完成度の高いものであり、これ自体が文化遺産とでき

るものです。

もうひとつの記事は大正6年10月31日付の「河内国府遺跡調査(13) 獣魚骨歯と結語」で、同じく岩井雍南記者の署名記事です。



写真9：大阪毎日新聞 大正6年10月31日付  
「河内国府遺跡調査(13) 獣魚骨歯と結語」

Ⅸ 道明寺天満宮の発掘調査支援

この写真(写真10)は、大正時代の国府遺跡発掘調査時に執り行われた慰霊祭の様子を撮影したもので、道明寺天満宮に保管されてきました。また、道明寺天満宮宝物館には、国府遺跡の出土遺物が所蔵されています。特に、2点の玦状耳飾は出土した遺跡や埋葬人骨との関係が明確という点で重要です。この2点がここにあるのは、たまたま遺跡に近いから所蔵されているというような話ではなく、しかるべき正当な理由があります。

先ほど、国府遺跡の発掘調査は大正6年(1917)に開始されたと申しましたが、6年間に及んだ大正時代の発掘調査の大部分について、ここ道明寺天満宮の宮司さんが支援されていた事実が、近年見いだされた『国府遺跡発掘一覧表』(写真11)という文書により、さらに明確になりました。



写真8：大阪毎日新聞 大正6年10月15日付  
「河内国府遺跡調査(1) 今回の学術的発掘」



写真10：法要の様子(南坊城2005)

この文書は、筆跡から現宮司でおられる南坊城充興さんの祖父である、第3代宮司の良興さんが認められたと推定されるもので、発掘地点や出土品などについて詳細に記載されています。従来から、濱田耕作先生や本山彦一氏らの発掘調査隊は国府遺跡から約10分の南坊城良興さんの私邸に滞在して調査を実施されたことが、伝聞や当時の新聞記事をはじめとした断片的な記録などから推定されていましたが、今回、道明寺天満宮の方でもそれを証明する文書が保管されていたことで、南坊城良興さんが発掘調査に深く関与され支援されていたことが判明しました。



写真11：国府遺跡発掘一覧表（南坊城2005）

なお、道明寺に保管される玦状耳飾は、昭和12（1937）年に刊行された『松陰本山彦一翁』という本山氏の伝記に、「道明寺土師神社宝物館に耳輪1個を寄贈」とあり、南坊城良興さんの物心両面に及ぶ献身的な協力に対して、道明寺天満宮が所蔵される結果となりました。なお、耳輪1個とあるのは、同じく埋葬人骨と共に京都帝国大学に寄贈された玦状耳飾2対4個の表記方法が2個とあることから、1対で1個と表記したものと判断できます。

この間の顛末については、わが関西大学文学部史学・地理学科を1997（平成9）年3月に卒業された禰宜・南坊城光興さんが、今年の3月に刊行された『阡陵』第50号に、「国府遺跡と道明寺天満宮」と題して紹介されています。

現在では、様々な問題を含みつつも調査体制が整備され、考古学的な発掘も大部分がある種、手

続きとして行政的に機械的に行われていますが、第二次世界大戦以前は世の中の役に立たないものの双璧として、考古学と天文学があると、例えられていました。このような逆境ともいえる歴史を経て、社会的にも認知された今日の考古学があるのは、各地において南坊城良興さんのような理解者の支援がなければあり得ず、日本考古学が発展した陰の功労者の一人とすることができます。

## 2. 玦状耳飾の形態や変遷、製作技法など

### I 関西大学博物館の所蔵する国府遺跡出土品

関西大学博物館では、重要文化財を16点所蔵していますが、実にその中の15点までが国府遺跡関係の資料です。

これらの2点（写真12）は、国府遺跡から出土した重要文化財の一部です。左の鉢形土器は胴部上半部に5条の爪形文、下半部に羽状縄文を施す縄文時代前期のもので、第4次調査の大串氏第3人骨の胸上から出土しましたが、その右耳には玦状耳飾が装着されていました。右側のヘラ描沈線の綾杉文や2個1対の円形浮文が施された高杯形土器は、古墳時代前期に位置づけられます。



写真12：右・高杯形土器、左・鉢形土器  
（共に重要文化財）（関西大学博物館1998）

### II 玦状耳飾

玦状耳飾の名称は、古代中国の「玦」に形態が類似することに由来しますが、中国で「玦」とは腰に吊しておく一揃いの器物の一つであり、弓を引く時に親指にはめる、突起のついた指輪状の道具を指します。中国では戦国時代から漢代に裝飾品化した玉器も、玦と呼ばれました。

玦状耳飾は縄文時代前期を中心に流行しましたが、縄文時代前期の年代については、一般的に紀元前3500年から4500年前後（今から5500～6500年前）とされています。これらの年代観は

放射性炭素C 14の性質を利用した年代測定方法に基づいています。ただし、近年ではC 14の年代を較正する必要性が唱えられており、将来的には年代観の修正が必要となるかもしれません。

なお、縄文時代前期は気候の変動が激しかった最後の氷河時代が終わり、温暖な沖積世がはじまった時期で、現在とあまり変わらない環境になった時期でもあります。温暖化にともない平均気温は現在よりも2度前後高め、海岸線が内陸に入り（縄文海進、平均5m上昇）、人口も10万人を超えたであろうと推定されています。

さて、一覧表（図5）は国府遺跡から発掘調査で出土した6対12個の特徴を、西口陽一さんが纏められたものです。この中で、関西大学博物館では、3対6個を保管しています（写真13）。大きさは右上のもので、直径5.1cmあります。なお、一覧表から、性別が判明している埋葬人骨は、女性ばかりであることに気づかれると思います。国府遺跡では現在まで80体以上の埋葬人骨が発掘されていますが、玦状耳飾は一部の女性に限って



写真13：関西大学博物館所蔵玦状耳飾  
（関西大学博物館 1998）

	左耳下	右耳下	備考
第3次調査 (大正6年10月)	4号(♀)		・2個とも濃緑色の滑石製。 (関大蔵)
	13号(♀)		・左は輝石(?)製、右は粗玉製。 ・白玉伴出。 (関大蔵)
	14号(♀)		・2個とも玉製。 ・上腕骨に鼠の歯痕。 (京大蔵)
第4次調査 (大正7年4月)	2号(?)		・2個とも凍石製。 ・胸上に4寸大の片麻岩1個を置く。 (京大蔵)
	3号(?)		・左は蛇紋岩(?)製、右は軟玉製。 ・完形深鉢形土器を伴出。 (関大蔵)
	4号(?)		・2個とも凍石製。 ・人骨片に伴出のため左右の特定は不可能。 (道明寺天満宮蔵)

図5：国府遺跡の玦状耳飾一覧

(梅原 1922 ほかより集成、一部改変) (西口 1983)

装着されており、埋葬の時期差もあると推定されます。神奈川県の上田浜遺跡(縄文時代早期中葉)では、3基の土壇から玦状耳飾が1対ずつ6個出土しており、藤田富士夫さんが推定するように(註7)、3世代に渡って埋葬された可能性があることを参考にすると、国府遺跡でも特別な女性が3世代以上に渡って埋葬されたのかもしれない。

また、1対となる玦状耳飾の色調や形態が異なることにも気づかれると思います。これらを検討した藤田富士夫さんらは、左耳の方が型的に古く、左耳優先である可能性があることを指摘されています(註8)。これは、一個だけ付けた埋葬人骨が左耳に付けていることが大部分であることから補強されます。この理由として、①通過儀礼や婚姻前と以後とで順次に付け加えたとする説や、②他集団へ婚姻などで移動したときに、その集団のものを新たに付け加えたとする説、③伝世品を左耳に付けて、右耳には一対の片方の1個を付け、もう片方の1個は子孫に譲ったなどの説などが提唱されています。

次に、先に取りあげた『松陰本山彦一翁』に記載されている、京都大学に埋葬人骨と共に寄贈された玦状耳飾です。先ほどの関大所蔵分共々、孔

が開けられたものが多いことに気づかれると思います。これは薄いために折れたものに孔を開けて結束・補修し、大事に使用した痕跡です。しかし、他の遺跡で出土した玦状耳飾の中には、破損していないにもかかわらず、上端に2～3個の孔を開けた例があり、中国における本来的な使用法との関連性をうかがわせると共に、その起源を考えると参考となります。

次の2点(写真14)は、本山彦一氏から道明寺天満宮に感謝の印として寄贈されたものです。

さらに2点の表面採集された玦状耳飾が知られています。これらを含めて、国府遺跡からは総数15～16個体の玦状耳飾が出土したと伝えら



写真14：道明寺天満宮所蔵玦状耳飾  
(藤井寺市教育委員会 1998)

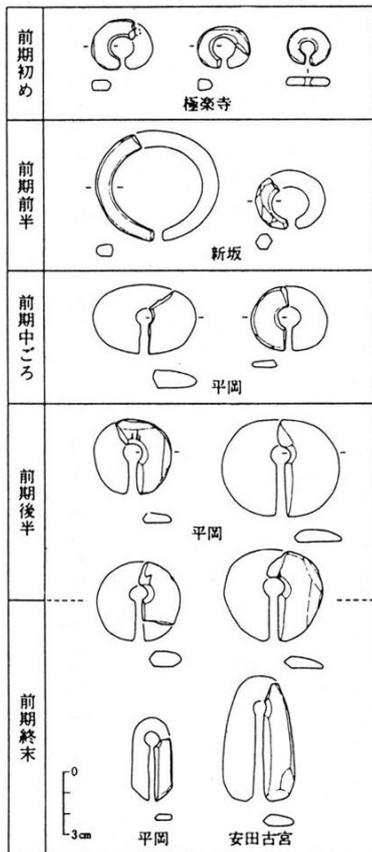


図6：玦状耳飾の編年(藤田 1992)

れています。

### Ⅲ 玦状耳飾の編年

発掘資料が比較的整っている富山県の玦状耳飾を編年された藤田富士夫さんの研究によると、一般的な傾向として、図6にあるように、形態が変化しました。前期前葉には、長軸を横位置に持つ長円系で断面は円形を示し、滑石や蠟石で作られました。前期中葉には円形で断面も薄く定型化したものになり、蛇紋岩製のものが出現します。前期後葉には長軸を縦位置にもつ長円系が主流になります。

この編年に国府遺跡の出土品を照らし合わせると、前期中葉から後葉にかけて位置づけられることがわかります。なお、現在のところ、玦状耳飾は縄文時代早期中葉に出現し、前期を中心にして、一部は後期まで耳飾りとして使用されたようです。

### Ⅳ 玦状耳飾の製作技法(図7・8)

玦状耳飾は、縄文時代の身体装飾品の中でも特異な存在であり、加工技術にしても、滑石や蛇紋岩などに孔を開けて切り込み、縁取りや研磨する工程は極めて高度なもので、加工技術やその展開についてもあまり明確に判らないのが現状ですが、切り込み加工の技術的特徴には中国・江南地

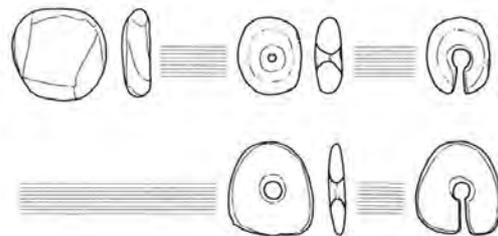


図7：玉飾製品製作工程模式図(山口 1990)

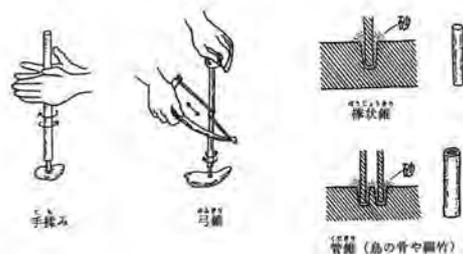


図8：穿孔の方法と用具(富山県埋蔵文化財センター 1997)

方と共通する特徴があり、その源流を暗示させる一つの根拠となります。

玦状耳飾の材質についてみると、鹿角製や土製品がありますが、軟質の石材を加工するものが中心です。石製品の製作地については、北陸から北信地方に縄文時代前期の製作地があり、その出現期から供給や受容のネットワークがあったことがうかがえます。なお、鹿角製品や木製品など、腐食しやすい有機質を材料とする玦状耳飾がもっとたくさん使われていた可能性があります。

また、土製品は関東地方で100個体以上集中的に出土するなど、各地で出土例が見られますが、藤田富士夫さんが指摘されるように、石製品の生産地である日本海側沿岸でも出土例が増加していることから、石製品の入手が困難な地域で代用品として用いられたというような、単純なものではないようです(註9)。なお、土製玦状耳飾には、補修痕のあるものや黒や赤に彩色されたものがあり、石製品と同様、大切に使われたことが判ります。

#### IV 玦状耳飾の装着法

この写真(写真15)は、関西大学博物館が所蔵する国府遺跡第3次調査で確認された第4号人骨の頭部石膏型です。玦状耳飾の使用方法を具体的に示す貴重な資料です。



写真15：国府遺跡第3次調査第4号人骨頭部石膏型  
(関西大学博物館 1998)

玦状耳飾の使用法にほぼ決着がついたのは、大正6(1917)年10月の大串菊太郎・本山彦一両氏による国府遺跡の発掘調査の結果です。それ以前、玦状耳飾は環石や石環などと呼ばれ、日本考古学の黎明期、すでに大野延太郎氏が古墳時代

の耳飾と形態が類似することから、耳飾りであろうことが類推されていましたが、はれて実証されることになりました。また、大串氏第13号人骨の頭部を覆っていた縄文時代前期の土器など、発掘調査の成果を受けて、梅原末治氏が玦状耳飾は、縄文時代の遺物で古墳時代の金属製品とは脈絡がないことを明らかにされています(註10)。この耳飾説は、大正9年に調査された岡山県の津雲貝塚で左耳に鹿角製の玦状耳飾を装着した、縄文時代後期の女性人骨が発掘されて、確定的になりました。

なお、出土状態を基にした装着模式図(図9)から明らかなように、玦状耳飾はクリップのように耳朶に挟んで付けるのではなく、耳朶に開けた切り込みを通して引っかけるように装着します。すなわち、耳朶には玦状耳飾の幅と同程度、切り開かれている必要があります。



図9：玦状耳飾装着模式図

### 3. 玦状耳飾の分布や源流など

#### I 玦状耳飾の分布(図10・11)

玦状耳飾は縄文時代の早期末までには出現し、前期末か中期初め頃までには北海道から九州まで普及します。石製の玦状耳飾は500個体以上出土しています。

東アジア的な視野からみた場合、濱田耕作先生や山内清男氏以来、形態的に玦状耳飾と関係が深いと考えられている最古の「玦」は、中国の河姆渡遺跡(かむど)で発掘されています。この浙江省余姚にあ

河姆渡遺跡は、1977・78年の二年度調査された新石器時代の遺跡ですが、早期河姆渡文化期とよばれる時代の土層から4点出土しています。殷・周時代の中国では、「玦」は「佩玉」として用いられているため、日本の玦状耳飾と比較することを疑問視する見解もありましたが、中国・江南地域の新石器時代の発掘調査が進むにつれて、耳飾りとしての使用法が確認されるようになりました。

例えば、江蘇州常州市にあるウトン遺跡は、紀元前4000年頃の青蓮崗文化の江南類型の文化様相と推定されていますが、M53と番号が付けられた成人女性の埋葬人骨の耳部から、「玦」の出土が確認されています。あわせて、ウトン遺跡で出土した穿孔石斧が、縄文時代中期の硬玉製大珠の原形となったのではという推論もあります。

従来の形態的な類似性の比較にくわえて、使用法の比較の観点を加味された西口陽一さんの研究では、河姆渡遺跡やウトン遺跡がある長江下流域を中心とする江南地域では6000年前から4000年前まで、「玦」の使用が続いており、やがて「佩玉」として長江中流域や東北部などに伝播していきます(註11)。この江南地方で「玦」が盛んに用いられた時期と重なる時期、すなわち縄文時代早期末から前期の時代に、日本列島で玦状耳飾が流行します。さらに、江南地方で「玦」の使用が衰退することと歩調を合わせて、日本列島でも玦状耳飾が衰退します。これらの状況から、玦状耳飾の起源は中国・江南地方と深い関係がうかがわれます。

ただし、縄文時代早期中葉まで遡る玦状耳飾の事例があることや、近年ではC14の年代を較正する必要性が唱えられていることから、日本独自に発展した装飾品の可能性もあります。例えば、北海道共栄B遺跡から出土した縄文時代早期後半の環状石製品は切れ目を入れると玦状耳飾になる形態であり、玦状耳飾の祖形の候補の一つと考えられています(註12)。

また、中国では「玦」にともなっている「璜(ネックレス)」がないことも、日本自生説に有利に働くかもしれません。先の藤田さんは、日本で半環状石製腕飾りとされる石製品が、「璜」ではないかと推定されています。また、泉拓良さんは、



図10：玦状耳飾・管玉分布図(川崎1998)

地域	<sup>14</sup> C年代 B.P.				
	6000	5000	4000	3000	2000
江南地区(A) (河姆渡-良渚)	←	←	←	←	←
日本(百) (縄文前期)	←	←	←	←	←
長江中流(C) (大溪)			←	←	←
中原地区(D) (崑山一類)			←	←	←
南海地区(E) (新石器-城岡)			←	←	←
西南地区(F) (瓊州-西漢)			←	←	←
東北地区(G) (瓦家店下層)			←	←	←



図11：東アジアにおける玦・玦状耳飾分布図と編年(西口陽一氏資料をもとに作成)(藤田1985)

山内清男氏が調査された安土遺跡の資料に、「玦」と「璜」が揃っていることを根拠にして、「璜」は急速に廃れたとして、玦状耳飾の中国起源説を唱えられています(註13)。

このように、論は尽きませんが、分布図から明らかのように、玦状耳飾に類した遺物は中国中原

から台湾、インドシナ半島など広範囲に分布しています。日本の玦状耳飾がどのような契機で出現し、これらとどのような関係性があり、意義をもつのか、興味深い問題です。

形態的には、河南省にある殷（紀元前 1600 年～1028 年頃）の大墓から日本の玦状耳飾とほぼ同型同大の遺物の出土が知られており、洛陽中州路の戦国時代（紀元前 403 年～221 年）の古墓群からは埋葬人骨の耳部分からの出土が知られ、国府遺跡と同じように耳飾りであることが明らかです。

## II 縄文時代の装身具

図 12 は、旧石器時代から飛鳥・奈良時代までの要素を視覚的に纏めた一覧表です。

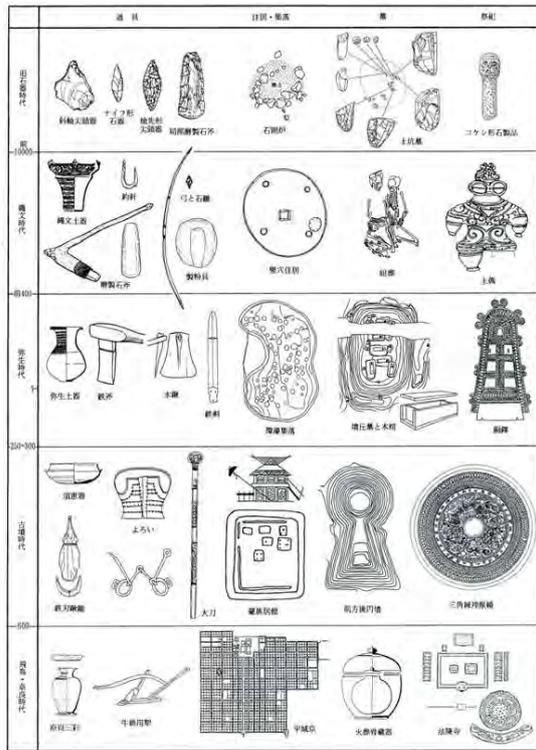


図 12：ものの移り変わり（日本第四紀学会編 1992）

玦状耳飾は縄文時代中期以降、耳栓・滑車形耳飾へと、その立場を譲っていき、後期には消滅していきます。

このような変化の中で装飾品をみた場合、現代では茶髪や長髪・髭・アクセサリーなど、個性を自由に表現することができますが、先史・原史・

古代では個人的な動機ではなく、所属する社会・集団の規制に従うものであり、支配者は特定のアクセサリーや髪形などで社会的身分や威厳などを表現しました。

## III 弥生時代の装身具

弥生時代になると装身具は多様化しますが、玦状耳飾の役割との関係でみた場合、貝輪に注目できます。この腕輪である貝輪は、南西諸島産のゴホウラ・イモガイの殻を輪切り・研磨して製作されたもので、呪術者や首長一族のみが装着をゆるされた貴重品であり、貝自体や巴形の円孔、渦巻き紋様もつ、呪力に着目したと想定する説が有力です。

例えば、福岡・佐賀県の埋葬人骨の例でみた場合、男（ゴホウラ）・女（イモガイ）とも右手に装着することが多く、利き手の右腕を使用しなくてもよい男性がいることや、ゴホウラ製腕輪を副葬された幼児がいることから、幼児期から特別に選別された可能性が想定されています。また、女性では、左右に装着する例も多く、両手とも不使用の人物が存在した可能性さえ推定されています。

## IV 古墳時代の装身具

写真 16・17 は、古墳時代の金環や勾玉、管玉などです。弥生時代から古墳時代になると、暗緑色の碧玉や淡い緑色をした緑色凝灰岩で貝輪を模倣した腕輪の製作が開始されます。弥生時代、貝輪はすでに儀礼や祭りの時だけに装着・使用し、見せびらかしに重点がうつり象徴化、すなわち持っていることだけでよい、人あるいは悪霊に見せるだけでよい、「見せる腕輪」に転化していますが、さらに古墳時代ではそれを与えられ所有し



写真 16：金環・金銅環 富木車塚後円部第 I 主体（大阪府立近つ飛鳥博物館 2003）



写真 17:首飾り(管玉・平玉・勾玉・算盤玉)  
豊中大塚古墳第1主体(重要文化財)  
(大阪府立近つ飛鳥博物館 2003)

ていることによって、ヤマト政権という後ろ盾があることを示す権威の象徴(威信財)に変化しています。また、配布する側にとっては、自らを中心とする勢力結集の目的で、製作を掌握したと考えられています。

古墳時代後期、6世紀には日本列島は我も我もと金製品の入手に躍起となり、黄金ブームが到来し、舶来旋風が吹きます。例えば、各地の首長は金属製の冠をかぶった、日本史上で稀有な時期を迎えます。同時に、新沢千塚、吉見百穴というように、小円墳や横穴墓が数多く(10万基以上現存)築造されます。有力な農民階層のほとんどが金銅製の耳飾りを副葬し、膨大な数量になる金製品と玉類の生産・流通体制が整備され、畿内の大王権が確立したことがうかがわれます。

## V 古代の装身具(写真 18)

ところが、7世紀以降の大陸(隋・唐)文化の模倣に伴い、いわゆる唐風が流行すると、直接的に身を飾ったネックレス・イヤリング・腕輪・指輪などはすべて衣服に吸収されてしまいます。色に溺れた人々は、アクセサリーを忘れ去ります。現在でも日本語に色彩に関する単語が多い理由は、ここに出発点があります。中国でも唐三彩の人物像や墳墓の壁画人物像などを見ると、舞姫などを例外として、ほとんど装身具を身に付けていない表現をとっています。

従来の装身具である金環や切り子玉などは、寺院の塔・舍利荘厳具などに使われるようになりました。その結果、例えば腰帯では、役人の種類や位によって、帯の長さ・幅、綴じ付ける部品、垂



写真 18:男子像・女子像 7世紀前半  
(大阪府立近つ飛鳥博物館 1994)

れ下げる部品の種類・材質など、細かに形式を規定しました。腰帯を見れば名を知らずともその役人の地位がわかるようになりました。ここに国家が装いを完全に統制する時代が到来し、身体装身具は急速に姿を消しました。

## 4. 国府遺跡発掘の意義

いささか話が冗長に流れてしまいましたが、最後に多岐に及ぶ国府遺跡の意義を2点に要約したいと思います。

第一に、本日の発表では取りあげませんでした、考古学の学史としてみた場合、国府遺跡は学術発掘により、近畿地方ではじめて後期旧石器時代(33000年前～12000年前)の石器(約20000年前)が確認された遺跡としても重要です(写真 19)。大正時代の発掘調査も、旧石器時代の石器の確認を目的に開始されましたが、先に述べましたように、すぐに縄文時代の埋葬人骨に関心が移りました。

それから40年、時に1957(昭和37)年のことで、発掘調査を担当された研究者の一人、鎌木義昌さんは、更新世の土層中から発見されたサヌカイト製のナイフ形石器(国府型ナイフ形石器)の一連の製作技法の過程を復元して(図13)、「瀬戸内技法」と命名されました。この世界に全く類例のない、サヌカイトの石材特性を生かした特徴的な瀬戸内技法で製作された石器は、全国的に観



写真 19：国府第 3 地点出土石器（国府型ナイフ形石器）  
（大阪府教育委員会 1990）

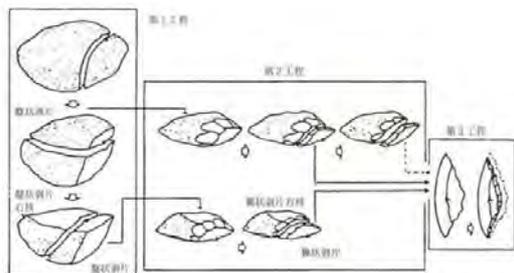


図 13：瀬戸内技法の工程概念図（松藤 1986）

察されており、その技術が拡散したことが判明します。このように、国府遺跡の名称に因んで命名された「国府文化」は、日本列島の後期旧石器時代のなかでも、周辺大陸では遺物が発見されていない、列島固有で独創的な石器文化として、光彩を放っています（註 14）。

第二に、国府遺跡の埋葬人骨の頭骨には、門歯や犬歯などを抜き取る抜歯や、フォーク状に削る（叉状）研歯などが観察できることに注目できます。抜歯は後期旧石器時代の沖縄港川人骨（約 18000 年前）に抜歯の痕跡があり、縄文時代晩期には成人のほぼ 100%が行っていましたが、弥生時代まで行われ、それ以降も特定の集団では継続した風習です。

一方、研歯（図 14）は縄文時代後・晩期に行われた風習で、この研歯を研究された春成秀爾さんによると、東海西部から近畿地方にかけて 29 例確認されていますが、性別の判る男女は同数（14 体ずつ）です。10 歳代の研歯例があり、抜歯と組み合わせて行われたり、研歯のあるものを合葬したり近接して埋葬している例があることから、特別の家系の者に若年で施した者と推定されています（註 15）。

従来の漠然とした、牧歌的で等質性の高い社会であるという縄文時代観から、近年の石川県真脇遺跡や青森県三内丸山遺跡などの発掘調査の成果をうけて、新たな飛躍的ともいえる縄文文化論が唱えられつつあります。ここではその評価についてはおきますが、少なくとも縄文時代が高度に完成された豊かな狩猟採集民社会であったということ为前提にした場合、国府遺跡の玦状耳飾は一部の女性だけが付けていることに加えて、その形態や材質に優劣があること、副葬品の有無とも一致している可能性があることなど、すでに縄文時代前期の社会に、定住や貯蔵が行われることをきっかけに、役割上の差や階層差などが生じていた可能性が示唆されます。

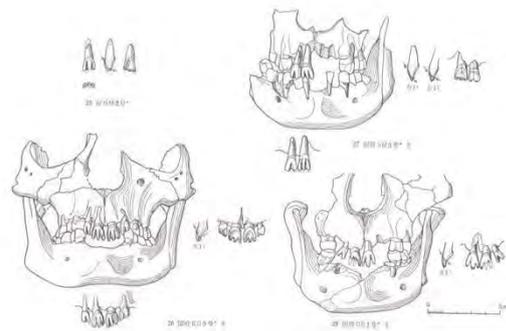


図 14：雷・国府遺跡出土人骨の叉状研歯（春成 1989）

これらをはじめ、国府遺跡の発掘調査は縄文文化、とりわけ近畿地方の縄文時代の研究に大きな影響を与えました。

以上のように、国府遺跡は、きわめて重要な遺跡でありながら、例えば、ご当地である藤井寺の名称の由来とも関係の深い、百濟系とされる渡来系氏族の白猪氏、720 年（養老 4 年）改姓して葛井氏の出身との説が有力な遣唐留学生「井真成」の墓誌（735 年正月没）の存在が昨秋中国・西安で発表されるなど、大きな発掘調査の成果が陸続と出される近年は、ややもすると忘れられたような存在にあるようにも見えます。

しかし、学史的にも重要な国府遺跡の歴史的資料を保管する機関に關係する者の一人として、遙か 2 万年前から国府遺跡の地に足跡を連綿と遺した先人に思いを馳せながら、本日の発表の結語とさせていただきます。

長らくのご静聴、誠にありがとうございました。

- 註 1：濱田耕作 1918「河内国府石器時代遺跡發掘報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第二冊  
濱田耕作・辰馬悦蔵 1920「河内国府石器時代遺跡第二回發掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第四冊
- 註 2：島五郎・山内清男・鎌木義昌 1957「河内国府遺跡略報」『日本考古学協会第二〇回総会』  
大阪府教育委員会 1970『藤井寺市国府遺跡調査概要』  
藤井寺教育委員会 1998『国府遺跡』藤井寺市文化財報告第 18 など
- 註 3：中西康裕 1997「史料にみる国府遺跡—志紀県主と志紀屯倉—」『国府遺跡の謎を解く』
- 註 4：藤岡謙二郎 1969『国府』日本歴史叢書 25
- 註 5：野上丈助 1977「河内国府と国分寺跡について」『古代を考える』10号
- 註 6：藤井利章 1984「河内国府と衣縫廃寺」『龍谷史壇』第 85 卷
- 註 7：藤田富士夫 1989『玉』
- 註 8：註 7 に同じ
- 註 9：註 7 に同じ
- 註 10：梅原末治 1971『日本古玉器雑攷』
- 註 11：西口陽一 1983「耳飾からみた性別」『季刊考古学』第 5 号
- 註 12：註 7 に同じ
- 註 13：泉拓良 1997「玦状耳飾の謎」『国府遺跡の謎を解く』
- 註 14：松藤和人・1997「国府型ナイフ形石器とは何か」『国府遺跡の謎を解く』
- 註 15：春成秀爾 1989「叉状研歯」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 21 集

---

米田文孝（関西大学文学部教授）

関西大学大学院時代から網干善教氏の下でインド仏教遺跡の発掘に従事。その後、網干善教氏の跡を受け、考古学担当者として関西大学に勤務。なにわ・大阪文化遺産学研究センター・生活文化遺産研究プロジェクト・プロジェクトリーダー。



# 圖版







写真 3：展示会場（渡唐天神図）



写真 4：展示見学風景



写真 5：展示解説風景（河内国府遺跡）



写真 6：展示解説風景（渡唐天神図）



写真 7：講演会 南坊城充興氏の挨拶



写真 8：公演中の長谷洋一氏



写真 9：公演中の米田文孝氏



写真 10：講演会の風景

## 挿図・写真出典一覧

### 「渡唐天神図について」

- 図 1 大阪天満宮所蔵
- 図 2 道明寺天満宮所蔵
- 図 3 道明寺天満宮所蔵
- 図 4 岡山県立美術館所蔵
- 図 5 道明寺天満宮所蔵
- 図 6 道明寺天満宮所蔵
- 図 7 道明寺天満宮所蔵
- 図 8 『七十一番職人歌合・職人尽絵・彩画職人部類』江戸科学古典叢書 6 1977
- 図 9 道明寺天満宮所蔵
- 図 10 道明寺天満宮所蔵
- 図 11 道明寺天満宮所蔵

### 「河内国府遺跡の意義と遺物」

- 図 1 藤井寺市教育委員会 1996 『ふじいでらカルチャーシリーズIV 国府遺跡の謎を解く』要旨集
- 図 2 筆者作成
- 図 3 藤井寺市教育委員会 1996 『ふじいでらカルチャーシリーズIV 国府遺跡の謎を解く』要旨集
- 図 4 天野末喜 2001 「附章 河内国府遺跡における縄紋墓地と集落」『石川流域遺跡群発掘調査報告XVI』
- 図 5 西口陽一 1983 「耳飾からみた性別」『季刊考古学』第 5 号
- 図 6 藤田富士夫 1992 『玉とヒスイ』
- 図 7 山口卓也 1990 「4. 遺物 c. 玉飾品」『ハチ高原縄文時代遺跡群』
- 図 8 富山県埋蔵文化財センター 1997 「(2) 玉作り」『平成 9 年度特別企画展 縄紋のなりわい 一 道具から見た暮らし』
- 図 9 生活文化遺産学研究プロジェクト RA 宮元正博作成
- 図 10 川崎保 1998 「玦状耳飾と管玉の出現—縄文時代早期末・前期初頭の石製装身具セットの意義—」『考古学雑誌』第 83 卷 3 号
- 図 11 藤田富士夫 1985 「縄文文化と海外の交流」『季刊考古学』第 12 号
- 図 12 日本第四紀学会編 1992 『図解・日本の人類遺跡』
- 図 13 松藤和人 1986 「旧石器時代人の文化」『日本の古代』第 4 卷
- 図 14 春成秀爾 1989 「叉状研歯」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 21 集
- 写真 1 生活文化遺産学研究プロジェクト RA 千葉太郎撮影
- 写真 2 生活文化遺産学研究プロジェクト RA 千葉太郎撮影
- 写真 3 生活文化遺産学研究プロジェクト RA 千葉太郎撮影
- 写真 4 生活文化遺産学研究プロジェクト RA 千葉太郎撮影
- 写真 5 生活文化遺産学研究プロジェクト RA 千葉太郎撮影
- 写真 6 濱田耕作 1918 「河内國府石器時代遺跡發掘報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第二冊
- 写真 7 濱田耕作・辰馬悦蔵 1920 「河内國府石器時代遺跡第二回發掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第四冊

- 写真 8 大阪毎日新聞 大正 6 年 1 0 月 1 5 日付「河内国府遺跡調査(1)今回の学術的発掘 岩井雍南」
- 写真 9 大阪毎日新聞 大正 6 年 1 0 月 3 1 日付「河内国府遺跡調査(1 3)獣魚骨歯と結語 岩井雍南」
- 写真 10 南坊城光興 2005 「国府遺跡発掘と道明寺天満宮」『阡陵』 No.50
- 写真 11 南坊城光興 2005 「国府遺跡発掘と道明寺天満宮」『阡陵』 No.50
- 写真 12 関西大学博物館 1998 『博物館資料図録』
- 写真 13 関西大学博物館 1998 『博物館資料図録』
- 写真 14 藤井寺市教育委員会 1998 『国府遺跡』藤井寺文化財報告第 18
- 写真 15 関西大学博物館 1998 『博物館資料図録』
- 写真 16 大阪府立近つ飛鳥博物館 2003 『平成 15 年度春季特別展 黄泉の国のアクセサリー 古墳時代の装身具』
- 写真 17 大阪府立近つ飛鳥博物館 2003 『平成 15 年度春季特別展 黄泉の国のアクセサリー 古墳時代の装身具』
- 写真 18 大阪府立近つ飛鳥博物館 1994 『大阪府立近つ飛鳥博物館常設展示図録』
- 写真 19 大阪府教育委員会 1990 『南河内における遺跡の調査 I』

## 河内国府遺跡里帰り展 展示品目録

### 第1 展示ケース

1 - 3	打製石斧または石鍬	弥生時代
4	削器	弥生時代
5・6	石刀（湾曲形削器）	弥生時代
7 - 14	石剣（打製短剣）	弥生時代
15	石庖丁	弥生時代
16	土製紡錘車	弥生時代
17	鹿角	弥生時代
18 - 20	石錘	弥生時代
21 - 30	骨角器	縄文時代
31・32	骨鏃	縄文時代
33	磨製石斧	縄文時代

### 第2 ケース

34	丸玉（複製）	縄文時代
35 - 40	块状耳飾（複製）	縄文時代

### 第3 ケース（縦型）

41	块状耳飾装着図骨模型	縄文時代
----	------------	------

### 第4 ケース

42 - 56	縄文土器破片	縄文時代
57 - 63	弥生土器破片	弥生時代
64	高杯形土器（複製）	古墳時代初頭

### オープン展示

65 - 76	甕形土器	弥生時代
77 - 79	壺形土器	弥生時代
80・81	高杯形土器	古墳時代初頭

以上 関西大学博物館所蔵

82・83	第4次調査4号人骨块状耳飾	縄文時代	道明寺天満宮所蔵
-------	---------------	------	----------

## 編集後記

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター Occasional Paper」No.2をお届けいたします。No.2は地域連携企画第1弾として、2005年10月22日（土）に道明寺天満宮天寿殿にて開催された「河内国府遺跡里帰り展」での講演の内容を収録したものです。

当日はあいにくの雨にもかかわらず、藤井寺市にお住まいの方がたを中心に、251名の方が会場に足を運んでくださいました。地元の方がたにとって、国府遺跡は身近なものであるはずなのに、これまで出土品を目にする機会がほとんどありませんでした。このたび、道明寺天満宮の協力のもと、それが実現いたしました。地元のみなさまの中での国府遺跡がようやくひとつになったのではないのでしょうか。発掘当時の様子を知るのはさすがにいらっしゃらなかったのですが、その後の国府遺跡について知らないことをたくさん教えていただき、また、我々にとっても大変勉強になりました。これが地域連携なのだと感じ、今後もこのように地域の方がたとの交流を持っていけるように努力していきたいと考えております。

「河内国府遺跡里帰り展」に際して、準備から図録作成など、多大なるご協力とご指導いただいた関西大学博物館の山口卓也氏、渋谷綾子氏、内野花氏、そして渡唐天神図に関してご指導いただき、当日は展示解説までしていただきました道明寺天満宮禰宜・南坊城光興氏にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

Occasional Paper No.2を刊行するにあたり、大阪市立美術館、大阪天満宮、大阪府教育委員会、大阪府立近つ飛鳥博物館、岡山県立美術館、関西大学博物館、京都大学文学部博物館、高石市教育委員会、道明寺天満宮、豊中市教育委員会、藤井寺教育委員会、毎日新聞社、南坊城光興氏には写真の掲載にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

本号の表紙は現在の国府遺跡を墨絵風にアレンジしてみました。

（編集委員 千葉太郎）

---

---

Kansai University Research Center for

**Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies Occasional Paper No. 2**

地域連携企画第1弾 **河内国府遺跡里帰り展**

発行日 2006年3月31日

編集・発行 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6388)9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/museum/naniwa/home.htm>

E-mail [naniwa@jm.kansai-u.ac.jp](mailto:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp)

印刷所 (株) 廣濟堂

---

---